２０１８．８．２４

大草

読書メモ

92．平田精耕「一切は空」集英社（1983.10）

93．「善人がなぜ苦しむのか」小坂国継　勁草書房（1999.1）

（90．梶山雄一「さとりと廻向」人文書院（1987.6））

**＜「空」仏教辞典から＞**

①うつろ　原語はsunyaは、膨れ上がって中がうつろなこと。転じて、無い、欠けた、又、インド数学では０を意味する。

②もろもろの事物は因縁により生じたものであって、固定的実体がないということ。単なる「無」ではない。存在するものには、自体、実体、我などというものはないと考えること。自我の存在を認め、あるいは我及び世界を構成するものの永久の恒存性を認める誤った見解を否定すること。無実体性。かりそめ。実体がないこと。固定的でないこと。一切の相対的・限定的ないし固定的なわくの取払われた真に絶対・無限定な真理の世界。有無等の対立を否定すること。破壊された後、何もないこと。

　大別して、人空と法空に分ける。

・人空（生空・我空ともいう）は、人間の自己の中の実体として自我などはないとする立場。

・法空は、存在するものはすべて因縁によって生じたものであるから実体としての自我はないとする立場。

・すべての現象は、固定的実体がないとする立場であり、空である（欠如している、存在しない）。従って、空は固定的実体のないことを因果関係の側面からとらえた縁起と同じことをさす。空を何も存在しないこと、などと誤って理解することを空病という。

③わがものという見解のないこと。十六行の一つ。

④むなしい。効果のないこと。無意義なこと。無効なこと。無駄なこと。

⑤虚空のこと。大空。

⑥虚空の譬喩（ひゆ）で、空の概念を表現したもの。空は常に術語的に表現されている。十種の譬喩の一つ。

⑦限られた空間。

⑧蒼空の空。青空の色の意。

⑨虚空無為のこと。

⑩宇宙が破壊されたままであること。

⑪大地の下にある空輪。

⑫ヴァイセーシカ哲学において九つある実体の第五。空虚な空間。その性質として声をもつ。

**＜別の仏経辞典から＞**

空とは、一切法は因縁により生じたものであるから、そこに我体、本体、実体と称するものがなく空しいこと。それ故に諸法皆空といわれる。このように一切は空であると観見することを空観という。空は、虚無（偏空）ではなくて、空を観ていることは真実の価値の発見であるから、真空のままに妙有である。これを真空妙有という。これに反して空の虚無的な理解を悪取空という。仏教の教理により、説明の仕方が一様でない。

①二空

・人空（我体と称すべきものがないこと）と法空（因縁により生じたものであるから、一切の存在自体が空であること、法無我ともいう）

・析空（しゃくくう：存在を分析して、そこに現れた空）と体空（存在の当体に即してそのままに空であること）

・担空と不担空

②三空

・法相宗での定義。無性空、異性空、自性空の三つ。

・人空、法空、俱空の三つ。

③四空

・法法相空、無法無法相空、自法自法空、他法他法空の四つ。

④六空

・内空、外空、内外空、空空、大空、第一義空、の六つ。

⑤七空（略）

⑥十空（略）

⑦十一空（略）

⑧十六空（略）

⑨十八空（略）

**＜平田精耕「一切は空」から＞**

・座禅をしていて、一切空の世界を発見したといって、その空の世界に耽着してしまうと、これを禅の病、空の病、「禅病」あるいは「空病」と名付けます。

・座禅をして、だんだん自分の意識というものの根柢へ自らをずっと深めていくと、本当に体全体が水晶のようになってしまう、そういう気持ちになることがあります。それがさとりであると思って、その世界にのみ執着すると、これまた空病に落ちてしまう。般若心経では、大変これを戒めておりまして、無智また無得、「智もなく亦た得ることもなし」と説きます。

・布施行

　布施は喜捨であり、布施をする者は、喜捨を受けてもらって感謝し満足することで徳を積む。これが布施行である。一方、布施を受けた側（修行者）は、喜捨されたものは本来何ものでもないことを知っており、好きにそれを処分することができる。喜捨した者は、その処分に関して口をはさんではならない。

**＜「善人がなぜ苦しむのか」小坂国継より＞**

・善人がなぜ苦しまなければならないのか？因果応報ではないのか？善因善果、悪因悪果ではないのか？

応報主義(因果応報)は宇宙を律する唯一絶対の理法ではないということ。宇宙は善悪・正邪の観念を超越しているということ。応報主義を否定せず、しかもそれに執着しない立場。

・我々は、人間中心的な応報思想の限界を自覚して、善悪にとらわれないような観点から世界を見るようにしなければならない。

・善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。

　善人とは、「自力作善」の人の意（善行により自力で往生することを願う人）

　悪人とは、「他力念仏」の人の意（他力で往生することを願う人）

・悪人正機説（一切衆生の救済）

　悪人とは、一切衆生のこと。

　通常いうところの善人とか悪人というのは、相対的なものであり、絶対的な尺度の下ではいづれも悪人となる。このことは、一切衆生が悪人であり、その悪人を救済するということになる。造悪愚痴の凡夫を救うこと。

・親鸞の悪の自覚は、個人的体験に由来する深い悪の自覚である。それは、表面的な道徳的・相対的な次元における悪の自覚ではなく、もっと深い次元の宗教的・絶対的な次元における悪の自覚である。それは、通俗的な良心よりもはるかに深いところで感得される罪業意識である。そのような次元においては、すべての人間は例外なく「罪業深重・煩悩熾盛（しせい）」の凡夫にほかならない。我々の良心が研ぎ澄まされれば研ぎ澄まされるほど、ますます我々は自分を罪人として悪人として自覚せざるを得ないのである。それは深い次元での罪の意識であり、悪の意識である。悪人正機説は、このような悪の自覚と、それを救おうとする阿弥陀仏の本願に対する信仰を逆説的な形式で表現したものであるといえよう。

・念仏を唱えるという「自力」が残っている。それは、自力でするのではなく阿弥陀仏によって唱えさせられていると考える。ここまでいけば、徹底した他力といえよう。自力が自己の「はからい」であるとすれば、他力とはそのような「はからい」が全くないことである。

・人間の一切の「おこない」や「はからい」を否定する考え方が、「無義の義」という観念である。義とは「はからい」のこと。歎異抄第10章「念仏には無義をもて義とす。不可称・不可説・不可思議のゆへにと、おほせさふらいき」とある。「行者のはからいは自力なれば義というなり。他力は、本願を信楽して、往生必定なるゆへにさらに義なしとなり」とある。親鸞のいう「自然法爾」（自力でなく如来の誓いによるとの意）も同じ考えである。

・親鸞の考えでは、一切の行為は我々の持って生まれた素質や性向から生じるのであって、自分の意思や努力の結果ではないという。これを宿業とか業縁と呼んでいる。これは、阿弥陀仏の願力でも廃棄することができない。従って、阿弥陀仏は悪行を審（さば）いたり、否定しないで、悪を悪のまま救いとろうとする。

⇒現代では、行為は意思や努力の結果と考えており、一切の行為の責任をとらねばならない。

　親鸞の考え方は、何かの縁（業縁）があってその行為をするのであり、縁がなければ行わないというもの。EX.1000人の人を殺せとの命令に対して、自分の心がよいから殺さないのではない。業縁がないから殺さないのであって、業縁があれば殺すこともあるという。

　（なるほどと思うこともある。ナチスのユダヤ人殺戮、比叡山焼き討ちなど。）

**＜梶山雄一「さとりと廻向」より＞**

・大乗仏教は、輪廻説を世俗の法則として受け入れたが、同時に空と廻向の思想によって輪廻を超えることを教えた。この絶対的真理（勝義）としては、輪廻も空である、ということこそが、大乗出現の目的であったといえる。

・小乗諸部派のうちで最高の哲学的発展を遂げたのが説一切有部である。説一切有部は、「発智論」及び「俱舎論」において、廻向思想の発展に決定的な役割を果たしたと思われる議論を展開している。

・一切知者性とは、仏陀の知恵、空の知恵のこと。世俗の善行は、これに廻向され転換されたときには、勝義（絶対的真理）的な完全・完全性を持つものとなる。

・八千頌般若経は、六波羅蜜についての廻向を語る個所のすぐ後に、「内容転換の廻向」について同じことを説いている。布施は種子（B）であり、般若波羅蜜（智慧の完成）が、畑（K）であり、完成という名前が結果（P）である。

B　+　K　→　P　①マンゴーの種　+　畑　→　マンゴーの果実（内容の転換）

　　　　　　　　　②マンゴーに実は食物として人に向けられる（方向の転換）

・四無量心：四つの広大な心（慈、悲、喜、捨）

・ナガールジュナ（龍樹）の哲学

　龍樹（150～250年頃）は、大乗仏教・空の哲学を大成した人。主著「中論」。

「滅しもせず、生じもせず、断絶もせず、恒常でもなく、単一でもなく、複数でもなく、来たりもせず、去りもしない依存性は（縁起）は、言葉の虚構を超越し、至福なるものである」とブッダは説いた。これを「不来不去の縁起」と呼ぶ。

・仏教では、すべてのものは、来る処も去る処もなく、ただ原因と条件が揃えば生じ、原因・条件が滅すれば滅するだけである。すべてのものは、自己存在性（自性・実体）を持たない、空であると説く。龍樹は、空の思想をもって、説一切有部の主張をすべて否定した。

・大乗仏教は、一挙に四暴流（しぼる）（欲、有、見、無明の四煩悩の激しい流れ）を超越する道を選んだ。

・輪廻の超越は、阿弥陀仏による業報の超越と本質を等しくするのである。

以上

**＜「英霊の谷」インパール征討作戦（児島襄）から＞**

・山中の道が「白骨街道」なら、（チンドウィン河）の渡河点（トンへ）の船着場は、「靖国の渡し」といえるであろう。